

歴史探訪

クラブ! 其の116

History Inquiry Club



文化財課 ☎23局 3635
FAX 22局 3811

豊川用水の生みの親 近藤寿市郎

田原市は全国一の農業算出額（平成18年）を誇る農業王国です。その礎となったのは、昭和42年の豊川用水の通水にはかなりません。水が豊富でない半島では、通水以前はため池やわずかな湧水、家庭では雨水のため、井戸水で散水用の水を確保していました。その苦労は、言葉では言い表せないほど大変でした。

さて、田原市の農業を発展させた豊川用水は、一人の政治家の発想から生まれました。その生みの親で

ある近藤寿市郎は、明治3年（1870）4月15日、現在の高松町に生まれました。高松村役場勤務などを経て、明治28年に高松村長になりました。そして、明治36年から渥美郡会議員、同44年から愛知県議会議員、昭和4年から衆議院議員、昭和11年から豊橋市議会議員、昭和16年から豊橋市長を務めました。

県議会議員時代の昭和11年、単身でジャワ島の農業水利事業や港の建設工事を視察し、「奥三河の宇連川にダムを築き渥美半島などへの灌漑用水路建設」や「豊橋港の改修事業」などの発想を得たといえます。そして、寿市郎は県議会でこの構想を提唱しました。しかし、土木機械が豊富な現代と違い、当時の人々とってその工事は予想もつかないことだったでしょう。あまりにも壮大な話であったため、県議会でもまったく相手にされず一笑に付されました。これらの構想は、のちに「近藤



●近藤寿市郎の像(赤羽根文化広場)

の三大ホラ」と言われたそうです。しかし、一つめのホラは豊川用水の通水として実現し、二つめのホラも一部は現在の三河港として、三つめのホラも現在の赤羽根漁港として、いずれも戦後になってから実現されています。決して「ホラ」ではなく、先を見る目があったと言えます。

終生、東三河の発展を願い「ホラ」を吹き続けた寿市郎は、豊川用水の完成を待たず、昭和35年4月14日に89歳で亡くなりました。

今では当たり前のように、バルブをひねれば作物に水を与えることができます。桶を担いで柄杓で水をまいた時代とは雲泥の差で、その苦労の記憶も薄れてきています。今だからこそ、豊川用水の恩恵に感謝をするとともに、この事業を成功させた寿市郎を始めとする関係者の人々の苦労を知る必要があるでしょう。

田原市教育委員会では、ふるさと学習を進めるにあたって、寿市郎のようふるさとに貢献した人たちの生き方を学び、その人たちの功績を風化させないため、田原市に貢献した人の情報を収集しています。行政・文化・産業など、あらゆる分野で活躍、貢献した地域の人の情報をお寄せください。

(増山)

今月の「表紙」

▼田原城跡にある大きな2本のイチヨウの木。昨年、台風18号で散ってしまつたので、今年こそは金色に輝く姿を撮ろうと心に決めていました。天気予報を見ては一喜一憂。風が吹かないか、台風は来ないか、晴れるかどうかなど。夏の猛暑で色づき心配でしたが、見事な姿を見せてくれました。(O)

【表紙の写真】田原城跡「桜門」のイチヨウ